小説……❶

山月記

中島　敦

隴西[1]の李徴[2]は博学才穎[3]、天宝[4]の末年、若くして名を虎榜[4]に連ね、ついで江南尉[5]に補せられたが、性、狷介[6]、自ら恃むところすこぶる厚く、賤吏に甘んずるを潔しとしなかった。いくばくもなく官を退いた後は、故山、虢略[7]に帰臥し、人と交わりを絶って、ひたすら詩作にふけった。下吏となって長く膝を俗悪な大官の前に屈するよりは、詩家としての名を死後百年に遺そうとしたのである。しかし、文名は容易に揚がらず、生活は日を追うて苦しくなる。李徴はようやく焦燥に駆られてきた。この頃からその容貌も峭刻[8]となり、肉落ち骨秀で、眼光のみいたずらに炯々[9]として、かつて進士に登第[10]した頃の豊頬の美少年のおもかげは、どこに求めようもない。数年の後、貧窮に堪えず、妻子の衣食のためについに節*を屈して、再び東へ赴き、一地方官吏の職を奉ずることになった。一方、これは、己の詩業に半ば絶望したためでもある。かつての同輩はすでにはるか高位に進み、彼が昔、鈍物として歯牙*にもかけなかったその連中の下命を拝さねばならぬことが、往年の儁才[11]李徴の自尊心をいかに傷つけたかは、想像に難くない。彼は怏々[12]として楽しまず、狂悖[13]の性はいよいよ抑え難くなった。一年の後、公用で旅に出、汝水[14]のほとりに宿った時、ついに発狂した。ある夜半、急に顔色を変えて寝床から起き上がると、何か訳の分からぬことを叫びつつそのまま下にとび降りて、闇の中へ駆け出した。彼は二度と戻ってこなかった。付近の山野を捜索しても、何の手がかりもない。その後李徴がどうなったかを知る者は、誰もなかった。

翌年、監察御史[15]、陳郡[16]の袁傪[17]という者、勅命を奉じて嶺南[17]に使いし、道に商於[18]の地に宿った。次の朝いまだ暗いうちに出発しようとしたところ、駅吏が言うことに、これから先の道に人食い虎が出るゆえ、旅人は白昼でなければ、通れない。今はまだ朝が早いから、いま少し待たれたがよろしいでしょうと。袁傪は、しかし、供回りの多勢なのを恃み、駅吏の言葉を退けて、出発した。残月の光をたよりに

中島　敦　一九〇九（明治四二）―四二（昭和一七）年。小説家。東京都生まれ。『名人伝』『李陵』など中国古典に取材した作品が多く、格調高い文体が死後高く評価された。この作品は一九四二年に発表されたもので、本文は「中島敦全集」第一巻によった。

1 **隴西**　中国の地名。現在の甘粛省の東南部。
2 **才穎**　才知がすぐれて抜きんでていること。
3 **天宝**　唐代の年号。七四二―五六年。
4 **虎榜**　進士（官吏登用資格試験）及第者の姓名を掲示する木札。俊才を虎にたとえた。
5 **江南尉**　江南（長江以南の地）の軍事や警察などをつかさどる官。
6 **狷介**　片意地で他人と相いれないこと。
7 **虢略**　中国の地名。現在の河南省にある。
8 **峭刻**　険しくむごいさま。
9 **炯々**　鋭く光るさま。
10 **登第**　試験に合格すること。「第」は、官吏登用試験。
11 **儁才**　才知のすぐれた人。俊才。
12 **怏々**　不平があり、心が満ち足りないさま。
13 **狂悖**　常軌を逸すること。
14 **汝水**　河南省崇県の老君山に発して淮河に注ぐ川。

〈博学〉〈焦燥〉〈下命〉〈往年〉〈自尊心〉〈自昼〉
＊節を屈する
＊歯牙にもかけない

林中の草地を通っていった時、はたして一匹の猛虎が叢(くさむら)の中から躍り出た。虎は、あわや袁傪に躍りかかるかと見えたが、たちまち身を翻して、元の叢に隠れた。叢の中から人間の声で「あぶないところだった。」と繰り返しつぶやくのが聞こえた。その声に袁傪は聞き覚えがあった。驚懼[20](きょうく)のうちにも、彼はとっさに思い当たって、叫んだ。「その声は、我が友、李徵子ではないか?」袁傪は李徵と同年に進士の第に登り、友人の少なかった李徵にとっては、最も親しい友であった。温和な袁傪の性格が、峻峭[21](しゅんしょう)な李徵の性情と衝突しなかったためであろう。

叢の中からは、[1]しばらく返事がなかった。しのび泣きかと思われるかすかな声が時々漏れるばかりである。ややあって、低い声が答えた。「いかにも自分は隴西の李徵である。」と。

袁傪は恐怖を忘れ、馬から降りて叢に近づき、懐かしげに久闊[22](きゅうかつ)を叙した。そして、なぜ叢から出てこないのかと問うた。李徵の声が答えて言う。自分は今や異類の身となっている。どうして、おめおめと故人(とも)の前にあさましい姿をさらせようか。かつまた、自分が姿を現せば、必ず君に畏怖嫌厭[23](けんえん)の情を起こさせるに決まっているからだ。しかし、今、図*らずも故人に会うことを得て、愧赧[24](きたん)の念をも忘れるほどに懐かしい。どうか、ほんのしばらくでいいから、我が醜悪な今の外形をいとわず、かつて君の友李徵であったこの自分と話を交わしてくれないだろうか。

15 **監察御史** 官吏を取り締まり、地方を巡行して行政を監視した官。
16 **陳郡** 河南省の地名。
17 **嶺南** 現在の広東省、広西壮族自治区およびベトナムの一部を含む地域。
18 **商於** 河南省の地名。
19 **駅吏** 宿駅の役人。
20 **驚懼** 驚きおそれること。
21 **峻峭** 厳しく険しいこと。
[1] 「しばらく返事がなかった」のはなぜか。
22 **久闊** 長く会っていないこと。「久闊を叙す」は、久しぶりに友情を温めることをいう。
23 **畏怖嫌厭** 畏れて、いとうこと。
24 **愧赧** 恥じて赤面すること。

後で考えれば不思議だったが、その時、袁傪は、この超自然の怪異を、実に素直に受け入れて、少しも怪しもうとしなかった。彼は部下に命じて行列の進行をとどめ、自分は叢の傍らに立って、見えざる声と対談した。都のうわさ、旧友の消息、袁傪が現在の地位、それに対する李徵の祝辞。青年時代に親しかった者どうしの、あの隔てのない語調で、それらが語られた後、袁傪は、李徵がどうして今の身となるに至ったかを尋ねた。叢中(そうちゅう)の声は次のように語った。

今から一年ほど前、自分が旅に出て汝水のほとりに泊まった夜のこと、一睡してから、ふと目を覚ますと、戸外で誰かが我が名を呼んでいる。声に応じて外へ出てみると、声は闇の中からしきりに自分を招く。覚えず、自分は声を追うて走り出した。無我夢中で駆けていくうちに、いつしか道は山林に入り、しかも、知らぬ間に自分は左右の手で地をつかんで走っていた。何か体じゅうに力が満ち満ちたような感じで、軽々と岩石を跳び越えていった。気がつくと、手先や肘のあたりに毛を生じているらしい。少し明るくなってから、谷川に臨んで姿を映してみると、すでに虎となっていた。自分は初め目を信じなかった。次に、これは夢にちがいないと考えた。夢の中で、これは夢だぞと知っているような夢を、自分はそれまでに見たことがあったから。どうしても夢でないと悟らねばならなかった時、自分は茫然(ぼうぜん)とした。そうして懼(おそ)れた。まったく、どんなことでも起こり得るのだと思うて、深く懼れた。しかし、なぜこんなことになったのだろう。

〈温和〉〈異類〉〈一睡〉〈無我夢中〉
*図らずも

分からぬ。まったく何事も我々には分からぬ。理由も分からずに押しつけられたものをおとなしく受け取って、理由も分からずに生きていくのが、我々生きもののさだめだ。自分はすぐに死を思うた。しかし、その時、目の前を一匹のうさぎが駆け過ぎるのを見たとたんに、自分の中の人間はたちまち姿を消した。再び自分の中の人間が目を覚ました時、自分の口はうさぎの血にまみれ、あたりにはうさぎの毛が散らばっていた。これが虎としての最初の経験であった。それ以来今までにどんな所行をし続けてきたか、それはとうてい語るに忍びない。ただ、一日のうちに必ず数時間は、人間の心が還ってくる。そういう時には、かつての日と同じく、人語も操れれば、複雑な思考にも堪え得るし、経書[25]の章句をそらんずることもできる。その人間の心で、虎としての己の残虐な行いのあとを見、己の運命を振り返る時が、最も情けなく、恐ろしく、憤ろしい。しかし、その、人間に還る数時間も、日を経るに従ってしだいに短くなっていく。今までは、どうして虎などになったかと怪しんでいたのに、この間ひょいと気がついてみたら、俺はどうして以前、人間だったのかと考えていた。これは恐ろしいことだ。いま少したてば、俺の中の人間の心は、獣としての習慣の中にすっかり埋もれて消えてしまうだろう。ちょうど、古い宮殿の礎[2]がしだいに土砂に埋没するように。そうすれば、しまいに俺は自分の過去を忘れ果て、一匹の虎として狂い回り、今日のように道で君と出会っても故人と認めることなく、君を裂き食ろうてなんの悔いも感じないだろう。いったい、獣でも

25 経書　古代の聖人や賢人の教えを記した儒教の経典。四書五経などをいう。

2「古い宮殿の礎」と「土砂」はそれぞれ何をたとえたものか。

人間でも、もとは何か他のものだったんだろう。初めはそれを覚えているが、しだいに忘れてしまい、初めから今の形のものだったと思い込んでいるのではないか？　いや、そんなことはどうでもいい。俺の中の人間の心がすっかり消えてしまえば、おそらく、そのほうが、俺はしあわせになれるだろう。だのに、俺の中の人間は、そのことを、この上なく恐ろしく感じているのだ。ああ、まったく、どんなに、恐ろしく、哀しく、切なく思っているだろう！　俺が人間だった記憶のなくなることを。この気持ちは誰にも分からない。誰にも分からない。俺と同じ身の上になった者でなければ。ところで、そうだ。俺がすっかり人間でなくなってしまう前に、一つ頼んでおきたいことがある。

袁傪はじめ一行は、息*をのんで、叢中の声の語る不思議に聞き入っていた。声は続けて言う。

他でもない。自分は元来詩人として名*を成すつもりでいた。しかも、業いまだ成らざるに、この運命に立ち至った。かつて作るところの詩数百編、もとより、まだ世に行われておらぬ。遺稿の所在ももはや分からなくなっていよう。ところで、そのうち、今もなお記誦[26]せるものが数十ある。これを我がために伝録していただきたいのだ。何も、これによって一人前の詩人面をしたいのではない。作の巧拙は知らず、とにかく、産*を破り心を狂わせてまで自分が生涯それに執着したところのものを、一部なりとも後代に伝えないでは、死んでも死にきれないのだ。

26 記誦　記憶し、そらんじること。

〈所行〉〈元来〉〈遺稿〉
〈伝録〉〈巧拙〉
＊息をのむ
＊名を成す
＊産を破る

袁傪は部下に命じ、筆を執って叢中の声に従って書きとらせた。李徴の声は叢の中から朗々と響いた。長短およそ三十編、格調高雅、意趣卓逸[27]、一読して作者の才の非凡を思わせるものばかりである。しかし、袁傪は感嘆しながらも漠然と次のように感じていた。なるほど、作者の素質が第一流に属するものであることは疑いない。しかし、このままでは、第一流の作品となるのには、どこか（非常に微妙な点において）欠けるところがあるのではないか、と。

旧詩を吐き終わった李徴の声は、突然調子を変え、自らを嘲るがごとくに言った。

恥ずかしいことだが、今でも、こんなあさましい身となり果てた今でも、俺は、俺の詩集が長安風流人士の机の上に置かれているさまを、夢に見ることがあるのだ。岩窟の中に横たわって見る夢にだよ。嗤ってくれ。詩人になりそこなって虎になった哀れな男を。（袁傪は昔の青年李徴の自嘲癖を思い出しながら、哀しく聞いていた。）そうだ。お笑い草ついでに、今の懐いを即席の詩に述べてみようか。この虎の中に、まだ、かつての李徴が生きているしるしに。

袁傪はまた下吏に命じてこれを書きとらせた。その詩に言う。

偶因狂疾成殊類[29]
災患相仍不可逃

今日爪牙誰敢敵
当時声跡共相高[30]
我為異物蓬茅下[31]
君已乗軺気勢豪[32]
此夕溪山対明月[33]
不成長嘯但成嗥[34]

時に、残月、光冷ややかに、白露は地にしげく、樹間を渡る冷風はすでに暁の近きを告げていた。人々はもはや、事の奇異を忘れ、粛然として、この詩人の薄幸を嘆じた。李徴の声は再び続ける。

なぜこんな運命になったか分からぬと、先刻は言ったが、しかし、考えようによれば、思い当たることが全然ないでもない。人間であった時、俺は努めて人との交わりを避けた。人々は俺を倨傲[35]だ、尊大だと言った。実は、それがほとんど羞恥心に近いものであることを、人々は知らなかった。もちろん、かつての郷党の鬼才と言われた自分に、自尊心がなかったとは言わない。しかし、それは臆病な自尊心とでも言うべきものであった。俺は詩によって名を成そうと思いながら、進んで師に就いたり、求めて詩友と交わって切磋琢磨に努めたりすることをしなかった。かといって、また、俺は俗物の間に伍*

27 意趣卓逸　心のおもむきがずば抜けていること。

28 長安　唐の都。漢代から唐代にかけて栄えた。現在の陝西省西安市付近。

29 殊類　異類。人間でないもの。

30 声跡　名声と業績。

31 蓬茅　よもぎと、ちがや。雑草一般をさす。

32 軺　小さな軽い車。一、二頭の馬が引く。

33 長嘯　長く声を引いて吟じること。

34 嗥　ほえること。叫ぶこと。

35 倨傲　おごり高ぶること。

〈高雅〉〈白露〉〈尊大〉〈羞恥心〉〈鬼才〉
＊お笑い草
＊……に伍する

することも潔しとしなかった。ともに、我が臆病な自尊心と、尊大な羞恥心とのせいである。己の珠にあらざることを惧れるがゆえに、あえて刻苦して磨こうともせず、また、己の珠なるべきを半ば信ずるがゆえに、碌々として[36]瓦に伍することもできなかった。俺はしだいに世と離れ、人と遠ざかり、[38]憤悶と[39]慙恚とによってますます己の内なる臆病な自尊心を飼いふとらせる結果になった。人間は誰でも猛獣使いであり、その猛獣に当たるのが、各人の性情だという。俺の場合、この尊大な羞恥心が猛獣だった。虎だったのだ。これが俺を損ない、妻子を苦しめ、友人を傷つけ、果ては、俺の外形をかくのごとく、内心にふさわしいものに変えてしまったのだ。今思えば、まったく、俺は、俺の持っていた僅かばかりの才能を空費してしまったわけだ。人生は何事をもなさぬにはあまりに長いが、何事かをなすにはあまりに短いなどと口先ばかりの警句*を弄しながら、事実は、才能の不足を暴露するかもしれないとの卑怯な危惧と、刻苦をいとう怠惰とが俺のすべてだったのだ。俺よりもはるかに乏しい才能でありながら、それを専一に磨いたがために、堂々たる詩家となった者がいくらでもいるのだ。虎となり果てた今、俺はようやくそれに気がついた。それを思うと、俺は今も胸*を焼かれるような悔いを感じる。俺にはもはや人間としての生活はできない。たとえ、今、俺が頭の中で、どんな優れた詩を作ったにしたところで、どういう手段で発表できよう。まして、俺の頭は日ごとに虎に近づいていく。どうすればいいのだ。俺の空費された過去は？　俺はたまらなくなる。そういうとき、俺は、向こうの山の頂の巌に登り、空谷[40]に向かってほえる。この胸を焼く悲しみを誰かに訴えたいのだ。俺は昨夕も、あそこで月に向かってほえた。誰かにこの苦しみが分かってもらえないかと。しかし、獣どもは俺の声を聞いて、ただ、懼れ、ひれ伏すばかり。山も木も月も露も、一匹の虎が怒り狂って、哮っているとしか考えない。天に躍り地に伏して嘆いても、誰一人俺の気持ちを分かってくれる者はない。ちょうど、人間だった頃、俺の傷つきやすい内心を誰も理解してくれなかったように。

3 俺の毛皮のぬれたのは、夜露のためばかりではない。

ようやくあたりの暗さが薄らいできた。木の間を伝って、どこからか、暁角[41]が哀しげに響き始めた。

もはや、別れを告げねばならぬ。酔わねばならぬ時が、（虎に還らねばならぬ時が）近づいたから、と、李徴の声が言った。だが、お別れする前にもう一つ頼みがある。それは我が妻子のことだ。彼らはいまだ虢略にいる。もとより、俺の運命については知るはずがない。君が南から帰ったら、俺はすでに死んだと彼らに告げてもらえないだろうか。決して今日のことだけは明かさないでほしい。厚かましいお願いだが、彼らの孤弱を哀れんで、今後とも道塗[42]に飢凍することのないように計らっていただけるならば、自分にとって、恩幸[43]、これに過ぎたるはない。

言い終わって、叢中から慟哭の声が聞こえた。袁[44]もまた涙を浮かべ、よろこんで李徴

36 碌々　石がごろごろしているさま。平凡で役に立たないさま。
37 瓦　値打ちの低いもののたとえ。
38 憤悶　いきどおりもだえること。
39 慙恚　恥じていきどおること。
40 空谷　人けのないさびしい谷。
41 暁角　夜明けを知らせる角笛。
42 道塗　道。道途。
43 恩幸　いつくしみ。恩恵。
44 袁　袁傪のこと。

3「俺の毛皮のぬれたのは、夜露のためばかりではない。」とはどのようなことか。

〈刻苦〉〈孤弱〉〈飢凍〉
＊警句を弄する
＊胸を焼く

の意*にそいたい旨を答えた。李徴の声はしかしたちまちまた先刻の自嘲的な調子に戻って、言った。

本当は、まず、このことのほうを先にお願いすべきだったのだ、俺が人間だったなら。飢え凍えようとする妻子のことよりも、己の乏しい詩業のほうを気にかけているような男だから、こんな獣に身を堕とすのだ。

そうして、付け加えて言うことに、袁傪が嶺南からの帰途には決してこの道を通らないでほしい、その時には自分が酔っていて故人を認めずに襲いかかるかもしれないから。また、今別れてから、前方百歩の所にある、あの丘に登ったら、こちらを振り返って見てもらいたい。自分は今の姿をもう一度お目にかけよう。勇に誇ろうとしてではない。我が醜悪な姿を示して、もって、再びここを過ぎて自分に会おうとの気持ちを君に起こさせないためであると。

袁傪は叢に向かって、ねんごろに別れの言葉を述べ、馬に上った。叢の中からは、ま

橋本雅邦「龍虎図」部分（1895年）

た、堪え得ざるがごとき悲泣の声が漏れた。袁傪も幾度か叢を振り返りながら、涙の中に出発した。

一行が丘の上についた時、彼らは、言われたとおりに振り返って、先ほどの林間の草地を眺めた。たちまち、一匹の虎が草の茂みから道の上に躍り出たのを彼らは見た。虎は、すでに白く光を失った月を仰いで、二声三声咆哮したかと思うと、また、元の叢に躍り入って、再びその姿を見なかった。

45 咆哮 ほえること。

〈悲泣〉
＊意にそう
＊ねんごろ

●理解●―

(1)「俺はしあわせになれるだろう」（一七・4）とはどのような心情か、説明しなさい。

(2)「尊大な自尊心と、臆病な羞恥心」となるところを、あえて「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」（二〇・1）としたのはなぜか、説明しなさい。

(3)李徴の語る部分で、「俺」と「自分」はどのように使い分けられているか、説明しなさい。

(4)「月」を描いた場面をまとめ、「月」がどのようなものとして描かれているか、説明しなさい。